太閤秀吉公と金子直吉翁

小野三郎

落日の名将を思わす事業の鬼、金子直吉翁の御生涯は、昨年の春から催された中小企業センター神戸歴史展に依って市民らの眼を驚かしているが、とりわけあの「天下三分の計……」の遺芳がその当時をものがたっていて大衆に受けている。

金子直吉翁と谷治之助氏

翁が戦国時代、戦略功を奏し天下を掌握された太閤秀吉公の心境にも相似るものを恒にと考えさされたが、折しも偶々兵庫県警察本部長武藤　誠氏近著「名将に学ぶ」を拝読し、豊太閤の興味ある史話に感動大いに学ぶところが多かった。

茲にこの文を頂き、原文通り転記、諸兄に御紹介申し上げます。

寛容　豊臣秀吉

小田原城に北条氏政を攻めたとき、奥州の伊達政宗が秀吉のところに来陣して臣従を願い出た。秀吉は政宗の来るのが遅かったことを怒って、政宗が小田原城の攻略の成り行きを傍観して、形勢が秀吉方に有利になったところできめて来たのであろうと詰問した。そこで政宗はひとえに遅参したことを詫びた。

二、三日過ぎて秀吉は政宗に対面を許したが、やがて退こうとしたとき「遅参したことは不都合なことであるが、いまここでお前に対顔を許したうえは心中なにもわだかまりを持っていない。ここまで遠路わざわざやって来たのでそのもてなしとしてわが陣営を見せよう。」といって、ともにうしろの山に登った。秀吉は「お前は奥州で小ぜり合いにはなれているだろうけれども、大合戦の軍勢の配置には不馴れであろうから教えてやろう。」といって、この陣構えはこうした理由からだとこまかく教えてやった。このとき、秀吉は自分の刀を政宗に持たせて、ただ小姓一人を連れて、うしろも見返えらず、政宗をなんとも思わないでいであった。

やがて、政宗が秀吉に暇を乞うたときに、侍臣達がいま政宗を奥州に帰されるのは虎を野に放つようなものですと意見したが、秀吉は「政宗ごときが奥州で威を振うのは井の中の蛙のようなものだ。いまわが陣営の堂々としているのを見て驚いてしまった。もう血を流さずして奥州を平げたようなものだ。」と語った。

後年、政宗はこのときのことを想起して、このときはただおそれ入ったばかりで、いささかも秀吉公を害しようなどといった気持ちは起こらなかった。秀吉公は大人物であってみずから備わった威厳のある人であったといった。

＊

秀吉が薩摩の島津義久を下したあと、島津の家臣の新納武蔵守忠元を謁見し、まだいくさがしたいかとたずねた。新納は「主人に敵対されるならば幾度でも戦いをします。」と答えた。秀吉はさすがの勇士であるといってこれを賞め、着けていた陣羽織をぬいで与えた。

新納はこれをいただいてつぎの間にさがろうとしたところ、秀吉はまだやるものがあるぞといって側に立ててあった白刃の長刀の首もとをつかんで石突の方を出して与えた。この姿勢であると新納に害心があればいつでも秀吉を刺せるのであるが、彼は秀吉の豪胆な振舞いに身ぶるいをしてこれを受けとって退いた。

やがて帰宅した新納は、若い侍たちにきょうの首尾はどうだったかを聞かれて「とても俺の手向うようなお人ではない。さすがの俺もきょうばかりは腰が抜けた。」と語った。

＊

秀吉の家臣達で他に仕官しようとして暇を願い出て来た者はそばに呼び、みずから茶をたててもてなしたうえ、脇差などを与えたうえで「どこに行っても思わしくないときには、またここに帰って来い。いつでもまた召抱えてやる。」と、きわめてねんごろにいって暇を出してやった。また、他所でよい禄につけなかった者が再び奉公を願い出て来たときには、もとの待遇で召抱かえてやった。

＊

秀吉の前で祐筆の者が書いていたときに、醍醐の醍という字を忘れた。秀吉は畳の上に「大」の字を書いて見せて「お前は知らないのかこう書くものだ。」

俳句を作って「奥山にもみじふみ分け鳴く蛍」とやったので俳匠が、蛍は鳴く虫ではございませんといったところ、秀吉は「蛍は鳴く虫でなくても、わしが鳴かせようと思ったら鳴かせないでおくものか。」といった。

＊

ある人が秀吉に京の東山の松茸が多くできてみごとなことを話したところ、では近日中に松茸狩りにいくといった。側近の者達が気をきかせて、ほかの者にさきに松茸をとられないように見に行ったところ早くも京中の者達がとり、残り少なくなっていたので、急いで各地の山から松茸をとり寄せて植え付けておいた。このあと秀吉は側近の者達と連れだって松茸狩りをしたが、たくさんとれたので機嫌がよかった。

秀吉の供をしたある侍女が、自然に生えたのと植えたのとは違っていて、すぐにわかるのに主君にはおわかりにならないのだろうかと気をきかせたつもりでひそかにこれを告げると、秀吉は笑って「そんなことは早くから私は知っている。しかし私を喜ばせようとしている者達の気持ちは何に代えることができようか。お前たちは黙っておれ。」と手で制止した。

また、山城の国の山里という一帯を梅松という側近の茶坊主に管理させておいたところ、そのうちに松の木を植え、間もなく松茸が生えるようになったので、これをとって献上した。「わが威光のせいである。松茸がこんなに早く生えるのももっとものことだ。」といって喜んだ。梅松は、さらに秀吉を喜ばせようと思って、その後も度々献上したが、これは実は他所の山から求めたものであった。秀吉は、近臣の者にいった。「もう松茸を献上させるのは止めさせろ。少しあの山には生え過ぎるぞ。」

＊

秀吉は鶴を好んでいたので家来に飼育させていた。あるときのこと、監督の者がふとしたすきに鶴をのがしてしまった。秀吉にことのしだいを申しのべて、裁きを待っていた。

秀吉は「あの鶴はとつ国へでも逃げて行ったというのか」

「いいえ、あの鶴は飼鳥でございますので、そんな遠くまでは飛んで逃げられません。」

「日本国中、わたしの力の及んでいるところはわたしの籠と同じだ。またとらえたらよいではないか。」と笑っていった。

＊

秀吉がある合戦で宿営していたときに馬回役（親衛隊）たちの陣小屋を見て歩いたときのこと、中から鼓をうち唄っているので、中に入ってみたところ、一人が具足櫃に腰かけて鼓をうち、一人はうたい、一人は盃をもって楽んでいるところであった。供の者は秀吉がこれを見て怒ることだろうと心配したが案に相違して、あれを見ろ退屈しない者達だなと笑い、あの者に酒をとらせてやれ、そして、あまり飲み食いして酔いすぎないようにいっておけよといって通りすぎた。

また、他の合戦のときに、同じく陣屋を見まわったことがあった。あき地のところに青々とした菜の芽が生えていた。これを見て、長陣とみて退屈しないように菜をうえたのだなといって、米を与えた。

＊

秀吉が小田原に北条氏を取り囲んだときのこと、長い期間にわたって包囲したので、無聊を慰めるため陣中で能をやって観賞していた。

包囲軍側の将兵はいずれもその場所の前を通るときに下馬をして通っていた。たまたま、宇喜多秀家の家来の花房職之（もとゆき）が通りかかったとき、下馬もせず兜も脱がないで通り抜けようとした。

警固の者がこれを咎めたところ、職之は大音をあげて「ここは戦場ではないか。戦場で能などに遊びふけるような馬鹿な大将のそばを通るとき、なんで下馬しなくてはならんのか。」といって、乗馬のままで通りぬけ、おまけに秀吉のいる方に唾をはきかけた。

秀吉はこれを聞いて、怒り、早速主人の秀家を召し、ことのしだいを語って職之を縛り首にすることを命じた。

秀家はかしこまって、その場を立って一町ばかり行ったころ、秀吉は考え直し、すぐに秀家を呼び返し、「さっきは怒りにまかせて縛り首といったが、剛直の武士をそうするわけにもゆくまい。切腹させよ。」といった。

秀家はまた了承して、座を立ち、一、二町も行ったころ、秀吉はまた考え直してさらによび返し、「いま日本国内で、私に向かってこんな大言をはいた者は一人もいない。あっぱれ大剛の者だ。こんな男を殺すことは惜しいことだ。命を助ける。また、加増してやれ。」といった。

敵の勇士を賞めよ

長篠の合戦のときに徳川家康方の鳥居強右衛門は、長篠城を脱出して家康と連絡をとり、再び城に入ろうとしたところを武田勝頼の側にとらえられた。その際、城中に向かって家康の援軍は来る見込がないので降伏をしたほうがよいといったら助命するといわれた。しかし、城門の近くで間もなく援軍が到着する旨を大声で叫んだので、たちまち磔にされた。

家康はこれを評して、

「武田勝頼は大将としての器量がない。彼は鳥居のような勇士はたとい敵であっても命を助けてやり、その志を賞めてやらねばならない。

これは味方の者に対しても忠義をつくすことを教える実例にもなることだ。主君のために命を惜しまずに尽した勇士を磔にかけるというのは誤っている。このようでは、そのうちに勝頼の運がつきて滅亡するときには、譜代の家臣達ですらも寝返えりをうつことになるであろう。」といった。後日、家康の予言したとおりとなった。

＊

黒田如水が語った。

「私は将棋好きで、関白秀次公のお相手をさせられるが、実力は私より少し強い程度である。私が本気でやって負けると秀次公はわざと負けたのだろう、もう一番やれと仰せになる。

ところが秀吉公の方はどうやら駒のうごかしかたを知っておられる程度で、天下の名人を相手にやられるとき、先方が遠慮してわざと負けると、秀吉公はそれを知っておられるのに勝ったぞといって喜んでおられる。

秀次公のような小さな器では、とても秀吉公のあとを継ぐことはかなうまい。」

武将の年表

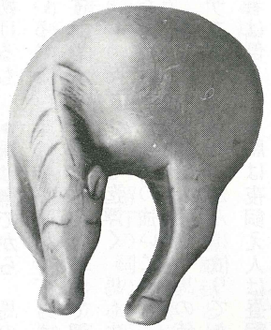
西暦（年号）	事項
一四七七（文明　九）	応仁の乱終わる
一四八一（文明一三）	朝倉敏景「敏景十七箇条」作る
一四八六（文明一八）	太田道灌謀殺さる
一四九一（延徳　三）	北条早雲（伊勢長氏）伊豆に進出
一四九五（明応　四）	北条早雲小田原城奪取
一五一九（永世一六）	北条早雲没、北条氏綱あとを継ぐ
一五二三（大永　三）	毛利元就家督を継ぐ
一五三七（天文　六）	豊臣秀吉生まる
一五四一（天文一〇）	武田信玄自立
一五四二（天文一一）	北条氏康自立
	斎藤道三自立
	徳川家康生まる
一五四三（天文一二）	ポルトガル人種子ケ島に漂着し銃砲を伝える
一五四七（天文一六）	武田信玄、民制五十五条（信玄家法）制定
一五四九（天文一八）	ザビエル、キリスト教を伝える
一五五三（天文二二）	上杉謙信、武田信玄、川中島に戦う
一五五五（弘治　元）	毛利元就、陶晴賢を討つ（厳島の戦）
	徳川家康元服
一五五六（弘治　二）	斎藤道三、子の義龍に殺さる
一五五八（永禄　元）	木下藤吉郎（秀吉）、織田信長に仕える
一五六〇（永禄　三）	織田信長、今川義元を桶狭間に破る
一五六二（永禄　五）	織田信長と徳川家康同盟を結ぶ
一五六七（永禄一〇）	織田信長、斎藤龍興を亡ぼす
一五七〇（永禄一三）	織田・徳川連合軍、浅井長政・朝倉義景連合軍を近江姉川に破る（姉川の戦）
一五七一（亀元　二）	毛利元就死す
一五七三（天正　元）	北条氏康死す
	武田信玄死す
	室町幕府滅亡
一五七五（天正　三）	織田信長、長篠に武田勝頼と戦い（長篠の戦）鉄砲使用
一五七八（天正　六）	上杉謙信死す
	山中鹿之助死す
	荒木村重、織田信長に叛く
一五八二（天正一〇）	武田勝頼、天目山に敗死
	織田信長、本能寺に死す（本能寺の変）
	明智光秀敗死（山崎の合戦）
一五八三（天正一一）	柴田勝家、賤ケ岳で秀吉に敗れ、のち敗死

一五八四（天正一二）　秀吉、大阪城を築く
一五八五（天正一三）　徳川家康、小牧、長久手に秀吉を敗る
　　秀吉、四国の長曽我部元親を降す
　　秀吉、関白となる
一五八六（天正一四）　秀吉、徳川家康和睦
　　秀吉、太政大臣となり豊臣の姓を賜る
一五八七（天正一五）　豊臣秀吉、島津義久を降し九州平定
一五八八（天正一六）　豊臣秀吉、刀狩令出す、兵農分離行なう
一五九〇（天正一八）　豊臣秀吉、小田原城を攻め全国統一完成
　　徳川家康関東に移封され江戸城入城
一五九一（天正一九）　毛利輝元、広島城に移る
　　豊臣秀吉、士農工商の身分統制実施
一五九二（文禄　元）　朝鮮出兵（文禄の役）
一五九三（文禄　二）　豊臣秀頼生まる
一五九五（文禄　四）　蒲生氏郷死す
　　関白秀次、秀吉に追放され高野山で自殺
一五九七（慶長　二）　豊臣秀吉、朝鮮再征（慶長の役）
　　小早川隆景死す
一五九八（慶長　三）　豊臣秀吉死す
一五九九（慶長　四）　前田利家死す
一六〇〇（慶長　五）　徳川家康、会津の上杉景勝討伐に関東へ
　　石田三成挙兵、徳川家康と関ケ原に戦い、
　　敗れて刑死
　　大谷吉継戦死
一六〇一（慶長　六）　板倉勝重、京都所司代となる
一六〇三（慶長　八）　徳川家康征夷大将軍となり幕府を江戸に開
　　く
一六〇四（慶長　九）　黒田如水死す
一六〇五（慶長一〇）　徳川家康、将軍職を秀忠に譲る
一六〇七（慶長一二）　徳川家康、駿府に移り住む
一六〇九（慶長一四）　徳川家康、西国大名の人質を江戸に集める
　　徳川頼房、水戸へ移封
一六一一（慶長一六）　幕府、キリスト教禁止
　　島津義久死す
　　加藤清正死す
一六一四（慶長一九）　大久保忠隣失脚
　　大坂冬の陣
一六一五（元和　元）　大坂夏の陣、豊臣秀頼自殺、真田幸村、後
　　藤基次戦死、豊臣氏滅ぶ
一六一六（元和　二）　徳川家康死す
　　本多正信死す
一六一九（元和　五）　福島正則失脚
　　島津義弘死す
　　直江兼続死す
一六二二（元和　八）　本多正純失脚
一六二三（元和　九）　徳川秀忠、将軍職を家光に譲る
一六二四（寛永　元）　福島正則死す
一六三二（寛永　九）　徳川秀忠死す
一六三四（寛永一一）　幕府、老中・若年寄の職務規定作る
一六三五（寛永一二）　参勤交代制確立
　　松平信綱、堀田正盛ら老中に昇任
一六三六（寛永一三）　伊達政宗死す
一六三七（寛永一四）　島原の乱、板倉重昌戦死
一六三八（寛永一五）　蜂須賀家政死す
一六三九（寛永一六）　鎖国完成
一六五一（慶安　四）　三代将軍徳川家光死す
　　由比正雪、丸橋忠弥等の反乱計画発覚

（兵庫県警察本部長　武藤　誠氏著「名将に学ぶ」から転載）

午歳の歴史

明治３年庚午　庶民称氏許可
15年壬午　軍人勅諭の頒布
　　刑法治罪法施行
　　条約改正を井上馨に委任
　　伊藤博文をヨーロッパに派遣
　　（憲法及国家制度調査の為）
　　東京専門学校（早稲田大学）
　　大隈重信に依り創立さる
27年甲午　日清戦争に勝っても露仏独干
　　渉して日本の権利放棄せしむ
39年丙午　西園寺内閣成立
　　南満州鉄道創立
　　後藤新平総裁



大正７年戊午　シベリア出兵
　　米価暴騰富山に米騒動起り各
　　地に波及する
　　ヴェルサエルに講話会議に使
　　節として西園寺公望、牧野伸
　　顕を派遣す
　　大学令高等学校令公布
昭和５年庚午　金解禁の実施
　　ロンドン海軍条約調印
29年甲午　造船疑獄

カットは目隠の馬

日本エヤーブレーキ株式會社

取締役社長　広瀬信衛

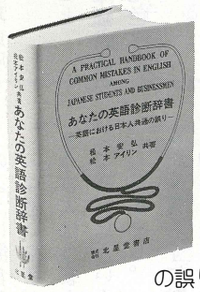
本　社　神戸市葺合区御幸通７丁目１－12
　　三宮ビル西館
　　郵便番号 651
　　電話　神戸(078)251－8101(大代)

事務所・営業所　神戸・東京・名古屋・
　　北九州・札幌
工　　場　神戸・東京・横須賀・
　　西神・甲南・西宮

あなたの
英語診断辞書
—英語における日本人共通の誤り—

101 東京都千代田区
神田錦町３－12　北星堂書店　振替東京８－16024
Tel.（294）3301

昭和51年６月新刊



松本安弘
松本アイリン　共著
Ｂ６・上製・函入
1,020頁　3,000円
送　料　200円

総見出し索引付(2,100項目)
画期的な辞書！
日本人の一般英語学習者や実務家がおかしやすい共通の誤りの実例を集めて，見やすい，分りやすい，利用しやすい辞書形式にまとめた本。
学生は勿論，大学受験生，実務家必読の辞書！

＊

松本安弘(土井株式会社・社長)
松本アイリン(故　土井内蔵・長女)